

Title	人間の言語から物の言語へ：ホーフマンスタール「手紙」再考
Sub Title	Von der Sprache des Menschen zur Sprache der Dinge : Hofmannsthals „Ein Brief" nochmals betrachtet
Author	大宮, 勘一郎(Ōmiya, Kan'ichirō)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2013
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.105, No.2 (2013. 12) ,p.48 (253)- 61 (240)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	ヨーゼフ・フュルンケース教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01050002-0048

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

人間の言語から物の言語へ

— ホーフマンスタール「手紙」再考 —

大宮 勘一郎

1 「言語喪失」の真相

1900年前後に、厳密な韻律形式に従った詩作から離れ、20世紀の散文家ともいべき存在へと転じたフーゴー・フォン・ホーフマンスタールは、その時期に深刻な精神的危機を経験したとされている。近い友人らと交わされた書簡などからすれば、これはあながち「伝説」の類ともいえないようであり、ゆえに韻文から散文へ、という断絶の原因と見做されることが多い。

周知のように、ホーフマンスタールの「断絶 *Bruch*」を最も能弁に語るテキストは、1902年の「手紙 *Ein Brief*」(いわゆる「チャンドス卿の手紙」)である。確かに「手紙」を散文への転回点と位置づけることはできる。しかし、従来からの定説たる「言語危機 *Sprachkrise*」という負の主題のみをこのテキストに読み取ろうとするなら、それは一方的である。

「断絶」は、文芸テキストとして表現を得たものから読み取ることができる限り、むしろ方法的に導入されたものと考えべきである。すなわち、「断絶」という中間休止 *Zäsur* を差し挟むことによって、より高次の文芸言語が模索されているのだ、と。その言語で書かれるべきものは、古典であり且つ現代であり、制作であり且つ批評であり、感性的であり且つ反省的であるような、新たな散文であった。作家個人の精神的危機は、この新たな言語の必要性に感応して生じたものであり、ゆえに「断絶」の一契機では

あっても原因などではありえない。別の言語で書く必要性を認めたがゆえに、従来の韻文で書くのをやめたのであり、韻文を書けなくなってしまったために別の言語を求めたのではない。予め先取りして述べるなら、ホーフマンスタールを襲ったのは、もはや書けぬ Nicht-mehr-schreiben-können という危機ではなく、未だ書けぬ Noch-nicht-schreiben-können というそれである。

この著名な架空書簡は、フィリップ・チャンドス卿と称する人物が、こちらは実在の哲学者フランシス・ベーコンに宛てて、さまざまな文芸著作計画の断念放棄を弁明する内容である。読者が著者ホーフマンスタールとチャンドス卿を同一視してしまう誘惑に駆られるに十分な事情であるが、そもそも彼は個人の体験を直接書き立てるにはあまりに技巧的な作家であった。また、発表の300年前にあたる1603年という日付を持つことからして、長いとは決していえぬこの書簡が、17～19世紀という、ヨーロッパ近代の学芸的言語を極めて凝縮的に捉え返す試みであることも明らかであろう。すなわち、「手紙」の歴史的射程は、例えばヴァルター・ベンヤミン1925年のバロック悲劇論『ドイツ悲劇の根源 Ursprung des deutschen Trauerspiels』のそれと正確に重なり合う。¹ゆえに両者の間には看過しえない共通の主題がある。

「手紙」に描き出されるのは、単なる一詩人の言語喪失ではない。差出人は「言葉による事象同士の関連づけの不能」という発語困難に苦しんでいる、と告白を始める。彼は、イデア世界を記述するプラトンを、その映像性ゆえに忌避する。つまり理念の言語の過剰に耐えられないのである。さらに彼は、概念の言語（いわば近代の学知的言語）の通俗化に身体的拒絶を自覚し、日常の噂の言語（いわば19世紀ジャーナリズムの言語）の曖昧さには曰く言い難い不快感を覚えるのだ、という。このように、様々な水準の言語の階梯を、文人たる自らが転がり落ちるような有様を書き綴っているので、ここに言語没落 Sprachverfall を読み取らないのは困難である。しかも差出人は、自分にとって「宗教」とは、既に彼方へ遠のいた「寓意 Allegorie」にすぎない、とさえ言うので、彼は象徴作用に満ちた「啓示の

言語 *Sprache der Offenbarung*」からも既に切り離された言語世界の住人でもあることになる。「手紙」をしたための以前の差出人が、この「人間の言語 *Sprache des Menschen*」の自立をむしろ言祝ぐような人文主義に根ざした著述家であったことを考えるなら、彼が被った暗転の示唆するところは深刻である。「啓示の言語」からの「人間の言語」の自立は表面的なものにすぎず、真相においては墜落であった——「手紙」に描き出される言語没落は、翻ってこのことを露呈させる。差出人を襲ったのは、神の言語から切り離され自立してしまった「人間の言語」が、その先さらに陥らざるを得なかった、必然的没落であったと考えることができる。

2 転回

しかし『ドイツ悲劇の根源』においてもそうであるように、それは事柄の一面にすぎない。「手紙」に現れている歴史は、言語の一方向的な没落史観によるものではない。というのも、この没落に対する自覚は、不意に新生に対する予期と畏れに取って代わるからである。

あらゆる方面から既に論じ尽くされている感のある「手紙」に、本論が新たに付け加えるべき論点がさほどあるわけではない。辛うじて指摘できる点はまだあるとすれば、それはテキスト前半部と後半部とを分断する、この決定的な変化であろう。「手紙」の差出人が苛まれていると報告する発語困難に関して、前半部では、従来用いていた言語がもはや意味連関の表現たり得なくなってしまうことに対するうろたえと喪失感が描かれている一方、後半部では、未だ語りえない言語が機会あるごとに、形も定まらぬままに湧出しようとしていることに対する慄きがそれにとり代わる。そして、差出人にとってより重大なのは、むしろ後者なのである。

「もはや～あらぬ *nicht* … *mehr*」の「未だ～あらぬ *noch* … *nicht*」への転化は、例えばベンヤミンのアレゴリー的な歴史理念においては、前者「もはや」すなわちアレゴリーによる不可逆的な言語解体の窮みにおいて、ようやく予感として兆すものである。これに対してホーフマンスタールの場合、この予感は「手紙」文面のちょうど中ほどで既に差出人を動揺させて

いる。そしてこの動揺は、不安と苦痛を伴ってはいるものの、根本においては幸福への期待に満たされてのものである。というよりも、不安も苦痛も、高まれば高まるほど喜びと似たものになっているのではないか。「手紙」が伝え寄越すのは、言語喪失の不幸などではなく、幸福の予感なのである。

来るべき新たな言語について、差出人はこう書き述べている。

それは同情などより遙か以上のものであり、また遙か以下のものでした。それはむしろ、ある恐るべき関与だったのであり、かの被造物たちへと流れ込むことだったのであり、あるいは一つの感じること、すなわち生と死、夢と覚醒の流体が一瞬の間彼らの中へと流れ込んでしまった——しかしどこから？——ことを感じることだったので。というのも、私があるまた別の晩に栗の木の根元に、庭師の俵の置き忘れの、水が半分残った如雨露を見つけるとするならば、この如雨露と、樹の影のせいで暗くなった中の水と、その水面で暗い岸から別の岸へと漕ぎ泳ぐミズスマシとが私を、この取るに足らぬものたちの集合が私を、無限なるものの現前で以て震撼させ、髪の毛根から爪先の髓まで震撼させ、私がまるで知らず、それを見出したとすれば、私その存在を信じてもない、かの熾天使ケルビムさえも屈服させるであろう、そのような言葉を叫び出したくなるとするならば、(……) そうしたことは同情などと何の関係がありますでしょうか？ また、理解可能な人間の思考における結合作用と何の関係がありますでしょうか？²

滅亡する古代ラティウムの街アルバ・ロンガや、さらにはローマに破壊されるカルタゴ、さらには毒を盛られた鼠の断末魔の姿が心の中で結びつく経験を描き出したのに続く長い一文で、「私を」、「震撼させ」などは、原文の繰り返しをやや無理に反映させたものであることをお断りしておく。

心に浮かんだ古代人たちや鼠の姿（しかも、偉大なる古代人たちよりもむしろ鼠、とある！）に対して沸き起こったのは同情などではなく、一般

的な連想によって説明できるものでもない、ある一つの「流れ込むこと」であり、またその流れ込みを「感じること」であったという。「しかしどこから？」という挿入が語るように、その流れ込みがどこに発するのか、このことすら「私」には定かではない。「私」が感じるのは、他ならぬ断末魔の鼠になることであり、如雨露になること、ミズスマシになること、それが泳ぐ水になること、であり、それらになる以前の「私」を忘れてしまうこと、あるいはさらに失ってしまうことである。そして、新たな言語の可能性もここにある。それは人間の言語であり且つ如雨露の言語、ミズスマシの言語、断末魔の鼠の言語でもある。ありとあらゆる被造物が相互に流れ込み合う際に、「私」の口を衝いて、しかし「私」の言語としてではなく、あらゆる被造物の言語として発せられるかもしれない、という予感に「私」は震撼する。というのも、そのようなとき「私」の統合は遂に失われ、「私」ならざる何かへと変容しているはずだからである。³

さらに、そこで差出人が「叫び出したくなる」のは、神の言葉の媒介者にして、樂園への立ち還りを火の矢で妨げるといふ熾天使をさえ屈せしめるような言葉なのだという。新たな言語は、もとより直説的な言語でも指令的な言語でもないが、神的な裁きの言葉にさえ抗しうる言語であることになる。これと同様の記述は、「手紙」末尾近くにもある。著作計画放棄に関してベーコンに最後の弁明を試み、というよりむしろベーコンの要求を最終的に突撥ね、自分は金輪際英語でもラテン語でも本など書かぬ、と宣言するのに続けて――

すなわち、それで以て書くのみならず思考するものとして私に与えられるかもしれぬ言語とは、ラテン語でも英語でもイタリア語でもスペイン語でもなく、それに属するただの一つの語さえ私が知らぬ言語だからであり、それによって物言わぬ事物が私に語りかけてくるような言語だからであり、それによって私は、いつしか墓の中で見知らぬ裁判官の前にして、自らを申し開くであろう、そのような言語だからであります。⁴

この物言わぬ新たな言語は、やはりここでも死後の裁きの言語に抗して立ち上る言語である。しかも、死後の法廷において誰が裁き手であるのかさえ判然としない。古い神なのか新たな神なのか、神ならざる何者かであるのか、テキストは何も教えない。一つ前の引用に従うなら、新たな言語は、言葉なき被造物の言語でもあるがゆえに、人間の言語の枠を超え出たものであった。それは、ある新たな「もの Ding」の存在を申し開く言語であると言えよう。ところが、その存在がいかなるものであるかも定まらぬがために、この言語は未だ発せられることがない。そして恐らく、発せられることのないままに300年を経してしまうのである。

3 国語の彼岸に

この300年は、その間に起こったはずの近代ドイツ文芸の勃興も定着も変容も、とはつまり文芸言語としてのドイツ語の歴史も、素通りしてしまう。すると、チャンドスの予感する言語は、そこにもないのだということだろうか。

上の引用でラテン語、英語、イタリア語、スペイン語が挙げられておりながらフランス語が、そしてとりわけドイツ語が抜け落ちているのも、16世紀初頭のイギリスを表向きの舞台にした書簡であれば、当然と言えば当然である。しかし、発語困難を訴えるチャンドスが「かつての自分」のものとして想起こす感応的で調和的な世界のありようは、ノヴァーリスの魔術的観念に多くを負うとされてもいる。⁵それが失われたのであるとすれば、ドイツの詩的言語の存続はもとより、その再興なども否定されることになりそうではある。

しかし、恐らくそうではない。新たな言語は、円滑な意思疎通と社交を可能ならしめる「国民言語＝国語」を語り書く主体の充実から発せられるものではない。そしてホーフマンスタールの描くチャンドスは、言語における「国語」以前の層、「国語」によって忘れさられ失われてしまった層の新たな蠢きに感応しているのである。そしてそれが「国語」ならざるもの

としての「ドイツ語」でないとは決して言えない。むしろ、ホーフマンスタールにとってそのような新たな言語はドイツ語でしかありえない。1928年のミュンヘン講演「国民の精神的圏域としての著作 *Das Schrifttum als geistiger Raum der Nation*」は、その証左である。ここでいう「国民 Nation」に、フランス（革命）的出自とは全く異なる概念化が施されていることにも留意が必要である。

差出人チャンドスを苛む「もはや」の喪失感と「未だ」の不安は、1902年には、別の言語による別の歴史でもありえたヨーロッパの近代に対する事後的な、つまり「もはや」の慙愧と、不意に差出人を襲いつつあった未知の言語が300年の後に甦り、その別の歴史をこれから書き得るかもしれない、という「未だ」の慄きへと転じつつ、反復される。1603年に差出人をとらえた旧言語の死の実感と新言語の誕生の予感が、1902年という日付において反復されるのである。そのような伝え寄越しと反復のメディアが、この「手紙」である。

およそ手紙とは、「別の時間 *andere Zeit*」のメディアである。手紙は、日常的には自覚されない時間の重層性を携えながら漂流する。これが届いてしまうことを「現在 *Gegenwart*」と呼ぶ。届かない限りにおいて、不意の衝撃からは免れることになる、つまり「現在」は取り逃され続ける。

さて、上引用部分は、「手紙」が書かれて18年ほど後に発表されたベンヤミンの「運命と性格 *Schicksal und Charakter*」の一節を想い起こさせる。この部分はさらに、『ドイツ悲劇の根源』のギリシャ悲劇論に自己引用されるのだった。そこでは、悲劇の英雄に固有の言語は反抗的「沈黙」である、というローゼンツヴァイクの議論が批評的に受け継がれている。すなわちベンヤミンによれば、そうとは知らずに神々の支配の限界を踏み出してしまい、罪ある者とされた英雄の沈黙は、神々への反抗の身振りではなく、自らの道徳的卓越を、神々に対して訴え語るべき言語を未だ持たぬがゆえの沈黙なのであった。

罪の霧からゲーニウスが最初に頭を擡げるのは、法ではなく悲劇にお

いてである。というのも、悲劇においてデーモン的な運命は破られるのだから。とはいえ、異教的で予見不可能な罪と罰の連鎖が、罪を清められ、純粹なる神と和解した人間の純粹さによって解かれるというような仕方ではない。そうではなく、悲劇においては異教的な人間が、自分はおのれの神々よりもよき者であると考えてののだが、しかしこの認識は彼から言語を奪い、言語は曖昧に沈んだままとなる。公然と語ることなく、言語はおのれの力 **Gewalt** を集わしめようとする(……)「人倫的世界秩序」が再興されたなどとはとても言えず、道徳的人間はいまだ黙したまま、未熟なままに——そのような者としてこそ彼は英雄なのだ——かの苦痛に満ちた世界の動揺の中で立ち上がろうとする。ゲーニウスが道徳的な言語欠如、道徳的未熟さから誕生するという、この逆説が、悲劇における崇高なものである。⁶

これもまた、破滅してゆく悲劇の英雄が語るべきであり、しかし未だ語りえぬ言語である。「手紙」の予感する言語との近接は明らかであろう。とはいえ、むろん古代ギリシャ悲劇の言語と、17世紀の文人の経験に仮託して20世紀のホーフマンスタールが示唆する言語とが、全く同じであるわけではない。一方は古代悲劇の英雄という特権的存在の、「私」などが出現する遙か以前の言語であり、他方は「私」以降の、人間から動植物さらには無機物にまで至るような、集合的で流動的な存在を示唆する。一見両者の距離は大きい。

しかし、そうでもないかもしれない。

ベンヤミンはギリシャ悲劇の英雄の物言わぬ言語に、運命（生あるものの罪の連鎖）に打ち克つ力 **Gewalt** の集結を認める。ギリシャ悲劇というジャンルにベンヤミンが認める単独性と一回性は、言語に内在するはずの、この解放的な力を初めて集結させたという点にあるだろう。この議論は、1916年の「言語一般について、及び人間の言語について **Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen**」などに見られる、「アダムの言語 **Sprache Adams**」という神的由緒を強調する点でユダヤ・キリスト教

的な色彩の濃厚な言語論とは別の系統のものとも考えることもできる。しかし、沈黙のうちに神々から自らを解き放つ力を蓄える、という潜在的特性が、神の言語からの脱落と、それゆえの拘束⁷という「人間の言語」の負の側面を補うものであるのは間違いない。

およそギリシャ悲劇を参照枠とする芸術言語は、この解放性の記憶を内胎するものでなければならないことになろうが、それだけではなく、創世記に拠る言語の神的由緒への拘束とギリシャ悲劇を範とする解放の潜勢力という、この結合が重要である。というのも、このことこそが「拒まれてあること」への拘束と、破滅を介した運命からの解放を同じ事柄の両面としてとらえる言語論を可能ならしめているのだからである。

そこで、一九二一年の「暴力批判論 Zur Kritik der Gewalt」における「純粹暴力 reine Gewalt」の理念を再考するのは無駄ではない。この力=暴力は、「神的な暴力 göttliche Gewalt」とも呼ばれるので、恰も神意の顕現であるかのように解されることもある。同様にベンヤミンの言語論をすぐれて神学的なものにとらえる立場もあり、それに従うなら、1916年の「言語一般」論文および1921年の「翻訳者の使命 Die Aufgabe des Übersetzers」にある「純粹言語 reine Sprache」の理念も、神の言語との類比、つまり神の言語への回帰として考えられることになるだろう。しかし、右に引いた、ギリシャ悲劇の英雄が語りえぬ言語を論じる部分は、ベンヤミンの暴力論と言語論の結びつきを別の視点から考える可能性を与えている。というのも、異教的古代の英雄が発語しようとするのもやはり、力=暴力 Gewalt の蓄積された言語、いわば暴力の言語であり、その発語不可能性は、個別の言葉へと特定化され得ない純粹さの謂いであり、ゆえに、ここで発せられようとして発せられ得ぬ言葉こそが、純粹な力すなわち純粹暴力の言語たる純粹言語なのではないか、という推測を許すからである。

すると、純粹言語とは、必ずしも神学親和的な歴史哲学上の理念としてではなく、ギリシャ悲劇に範を取った芸術言語一般に伏在する可能性として考えることのできるものであることになろう。無論、この可能性は現実となる——つまり、人間の経験的言語として発せられる——ことの決して

ない可能性であり、それゆえにこそ純粋な可能性なのであるから、「純粹言語」のこの把握と、歴史哲学における終末的理念としての把握との間に実は大きな隔たりがあるわけではない。しかし、芸術言語に潜在する「純粹言語」という把握のほうが、ドイツの文芸言語から（厳密には翻譯語としての文芸ドイツ語という、言語的限界から）析出されてきたこの理念の出自に、少なくともより見合ったものであるとは言えよう。

かくして、発せられぬ英雄の言語が「もはや」と「未だ」の間で動揺し続ける、というこの過程を「人間の言語」は辿ることになる。語るべきことを未だ語りえず、その空白を経巡って、語りうることのみをやまず語り続けざるをえず、そのうちに空白などは忘れられてゆく。饒舌の只中でしかし、もはや語りうることも尽き果てていることに気づいた者によって、不意に語るべきことの空白が再び自覚される——この反復が人間の言語の真相なのだ、とまで言ってしまうえば極論であるが、少なくともドイツの文芸言語は、このような忘却と回想からなる律動としておのれの歴史を顧みてきた。

つまり、この「語られるべき空白」に対する自覚は、いつの時代にも共有されるわけではない。ギリシャ悲劇にベンヤミンが読み取るような形なき力の言語の系譜とは無縁な文芸も、また成り立ちうるのであり、様式化するなわち彫琢や洗練がなされるのは、むしろそちらのほうであるのかもしれない。ゆえに、以下のことは様式的洗練を選び取った文芸の存在や価値を否定して言うのではないが、重大な作品が様式的な言語の欠如、芸術上の未洗練から誕生するという、この逆説が、悲劇に範を取ったドイツの文芸における「崇高」なのである。

4 自由と拘束の言語

悲劇の言語という系譜に連なる者は、様式化への力と闘いながら、しかも新たな様式を探り続けることになるだろう。前節で述べたように、近代のドイツ文芸は、従来の美的慣習の拘束から離脱することで自立を果たそうとしたのであった。するとこの離脱への意思は、慣習の拘束力が強けれ

ばそれだけ一層、強い表現を得てゆくことになるのだろうか。

実はそうではない。様式圧力の高まりに応じてそれに反発する力が蓄えられる、というような熱力学的アナロジーによってドイツ文芸の歴史を語るのには、明らかに19世紀的であり、一面的である。むしろドイツの文芸においては、形骸となった型を脱ぎ捨てる努力などよりもはるかに激しく、新たな拘束への予感、より強くおのれを縛る形 = Form への希求が刷新を牽引した。自発的拘束をやまず求めることこそが、ドイツ的自由の、またドイツ文芸の本質である——ミュンヘン講演のホーフマンスタールはこう考える。これが「保守革命 *konservative Revolution*」という理念の所以であろう。

そのようなドイツの文芸言語は、未だ語りえず、しかし語るべきことへと力を蓄える言語、すなわち来るべき言語に賭けたのであることになる。ゆえに、それが新たな範例的様式のようなものを生み出すことはありえない。求められる言葉は、ある様式に従えば易々と語られる、というようなものではないからである。究極的な Form への従属と拘束を求めて募る憧れは、そもそも充足というものを知らない。

従来の様式へと引き戻そうとする力と、それを斥けつつ新たな様式への従属を希求する力とが辛うじて拮抗する場合に、緊張度の高い言葉が辛うじて語られるかもしれない。その極端な例としてヘルダーリン、そしてクライストを挙げることができよう。そして、ホーフマンスタール1902年のテキストにおいて、ドイツ文芸のこの抗争は極めて凝縮された上で反復されている。一見様式の遵守と思われるところで、しかも、書き手も気づかぬうちに最も激しい抵抗が準備されていたことに、このテキストの読者は気づくのである。この抵抗は、旧言語に対する「もはや…あらぬ」という無効宣言において、始めはおずおずと、そして遂には比類なく明瞭に示されている。

ホーフマンスタールの、「裁きの言語」に相対して申し開くという「新たな言語」は、様式化への練達の極みにおいてこのような空白が不意に自覚される場所に予感される。「手紙」は、20世紀ドイツの文芸言語が、「新

たな拘束への解放 *Befreiung zur neuen Bindung*」を幾度目かに志向し始めたことの、非常に早い表現だったといえるのではないか。⁸

その文面は差出人の動揺の表現であるが、架空書簡の著者たるホーフマンスタールは、その知的均衡を決して崩すことなく、このテキスト「手紙」を書いている。言語自体が動揺し乱れるような箇所を、意図的であろうが幾分残しつつも、さきに指摘したように、「もはや」から「未だ」への転化がテキストのちょうど中央あたりに配されている点など、最終的には形式上の平衡と抑制が勝っていると読める。新たな言語の未到に対する動揺を内実としつつも、それを語る *Form* の乱れはない。しかし、この平衡と抑制は、いずれ到来するであろうものについての抜き差しならぬ予感からすれば、むしろ脆さを表現しているのではないか。

言葉の乱れにおいて解放への志向を示唆するような、暴力的な書き手にはなりえないホーフマンスタールの作品は、批評を顕在化させることもない。というのも、作品において批評が表面化することは、自らが宿す死の種子を芽吹かせてしまうこと、すなわち症状でしかないからである。批評は潜在的なものであってよく、またそうあらねばならない。そのようなホーフマンスタールにとって「手紙」は、危機の表現なのであるよりは、むしろ来るべき文芸言語の巫覡的託宣ふげきとさえいえるべきものであった。これは粗雑な比較にとどまらない。届けられ、送り出すというこの架空書簡の形式が、この表現を許すのである。つまりこれ以降、「決して書かれざるものを、読む」ことが、ホーフマンスタールの読者に求められる一方で、「決して書かれぬことを、(しかし、書かれるべき型に従って)書く」ことが、書き手である彼自身にも求められている。そこでは型の堅牢こそが、来るべき言語の暴力性への予感に駆られた備えをなす。いずれ破れることを知りつつ守り抜こうとする堅牢、なのである。

註

- 1 何もこれはホーフマンスタールとベンヤミンにのみ限定された偶然的符合ではない。これらの傍らにシュミット『政治神学』（1922年）、ハイデガー『存在と時間』（1927年）などを置けば、どれもが同じ歴史的射程で書かれたものであることが見て取れるはずである。『存在と時間』の「形而上学の歴史の破壊」もまた近代哲学を大きな標的としている。20世紀初頭のホーフマンスタールは、上に挙げた1920年代の重要な著作が立てるべき歴史的問いに先鞭をつけていたのである。ベンヤミンの敬愛の所以であろう。20年代に戯曲『塔 Der Turm』の執筆と改稿を繰り返したホーフマンスタールがシュミットにおいて自らの関心を再認した経緯については、以下を参照。Marcus Twellmann: *Das Drama der Souveränität. Hugo von Hofmannsthal und Carl Schmitt*. München 2004. 『塔 Der Turm』の政治神学的構成については、拙書『ベンヤミンの通路』とりわけ「V フェアはファウル、ファウルはフェア」参照。
- 2 Hugo von Hofmannsthal: *Ein Brief*. in: Ders.: *Sämtliche Werke. Kritische Ausgabe, Bd. XXXI. Erfundene Gespräche und Briefe*. Herausgegeben von Ellen Ritter. Frankfurt/M. 1991, S. 45-55, hier: S. 51f.
- 3 来るべき言語についてのこのような予感、例えばノヴァーリスが『ハインリッヒ・フォン・オフターディンゲン（青い花）』において、郷愁とともに語らしめる、万物がかつて有しており、人間とも交感していたという言語とは、似ていながら異なっている。ノヴァーリスにおいては、そのように回想される万物と交感可能な言語を取り戻すことによって、「詩人」がおのれの巨大な自我を自覚してゆくことになるのに対して、『手紙』に描かれるのは、人間の言語的空白を衝いて、事物がその口を通じて語る言語であり、人間をその主とすることの決してない言語なのだからである。
- 4 *Ein Brief*, a.a.O., S. 54.
- 5 H. v. Hofmannsthal, a.a.O., S. 298f. (Erläuterungen)
- 6 Benjamin: *Schicksal und Charakter*. In: Ders.: *Gesammelte Schriften*. Herausgegeben von Rolf Tiedemann und Hermann Schweggenhäuser. Frankfurt/M. 1972-1991, Bd. I-2, S. 175 / Ders.: *Ursprung des deutschen Trauerspiels*, GS I-1, S. 288f.
- 7 言うまでもなく「追放」とは最も強く酷い拘束である
- 8 もちろんここに、ゲオルゲからの離反という出来事が併せ考察されねばならない。普通に考えるなら、ゲオルゲの様式美学の拘束からホーフマンスタールは自分自身を解き放ったのだということになる。しかし、『手紙』に認められるのは、新たな言語の到来の予感に従った自己

拘束であり、離反・自己解放はその副次的所産として書かれているにすぎない。同様にゲオルゲとの「決別」も、より高次の Form への積極的な移行の結果と考えるべきであろう。そこで生じたのはゲオルゲ的な Form への意思の否定ではなく、その散文化 Prosaisieren であったといえよう。